HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリャーク語におけるS=A交替
Author(s)	呉人, 惠
Citation	北方人文研究, 7, 25-52
Issue Date	2014-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55036
Type	bulletin (article)
File Information	jcnh07-02-KUREBITO.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

コリャーク語における S=A 交替

呉人　惠
富山大学

1. はじめに

本稿では、コリャーク語 (Koryak : チュクチ・カムチャツカ語族)[1] における S=A 交替を包括的に記述する。コリャーク語の動詞の自他対応には、S が対応する P に相当するタイプ、すなわち、S=P 型と、S が A に相当するタイプ、すなわち S=A 型がある。次の (1)(2) は S=P 型の対応を示す（(1) は他動詞文、(2) は自動詞文）。

(1) ɣəm-nan　utəʔut　　t-ə-mle-n-Ø.
1SG-ERG　wood(ABS.SG)　1SG.A-E-break-3SG.P-PF
「私は木を折った」
(2) Uttəʔut　　məle-j-Ø.
wood (ABS.SG)　break-PF-3SG.S
「木が折れた」

一方、(3)(4) は、S=A 型を示す。この例では、他動詞文 (3) の P は、自動詞文 (4) では道具格に降格している。

(3) Apappo-na-k　　kimitʕa-w
grandfather-AN.SG-LOC(ERG)　household.belongings-ABS.PL
ɣe-jiwl-ə-linew-Ø　　ŋalvəlʕ-ə-ŋqo.
RES-carry-E-3PL.P-3SG.A　herd-E-ABL
(4) Appapo-Ø　　k-ine-jiwl-et-ə-ŋ-Ø
grandfather-ABS.SG　IPF-AP-carry-ET[2]-E-IPF-3SG.S
kimitʕa-ta　　ŋalvəlʕ-ə-ŋqo.
household.belongings-INSTR　herd-E-ABL
「祖父は家財道具をトナカイ群のキャンプから運んだ」

対応する他動詞文 (5) では明示されている P が削除される場合もある (6)（[Ꝑ] は P が削除されたことを示す）。

---

[1] 本稿の対象となるコリャーク語は、チャウチュヴァン (cawcəvan) 方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり : /p, t, t’, k, q, v, ɣ, ʔ, ʕ, c, m, n, n’, ŋ, l, l’, j, w, I, e, a, o, u, ə/。/t’, n’, l’/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [t͡ʃ]。

[2] このような文における接尾辞 -et/-at の機能は今のところ不明なため、ここでは暫定的に ET とグロスをつけておく。

(5) ə-nan k-ə-ʔaʔa-ŋ-ni-n ineŋ-Ø wenv-ə-jeweŋ.
3SG-ERG IPF-E-carry-IPF-3SG.A-3SG.P cargo.seldge-ABS.SG road-E-along
「彼は道沿いに貨物橇を引きずっている」

(6) ənno k-ə-ʔaʔa-cit-ə-ŋ-Ø wenv-ə-jeweŋ [Ꝑ].
3SG.ABS IPF-E-carry-AP-E-IPF-3SG.S road-E-along
「彼／彼女は道沿いに引きずっている」

S=P 型と S=A 型の自他対応のうち、S=P 型の自他対応については、呉人 (2013) ですでにその類型論的位置づけが明らかになっている。すなわち、コリャーク語の動詞の自他対応は、使役化、逆使役化、自他同形、補充法など多様なパターンを示すが、なかでも使役化、すなわち自動詞から他動詞を派生する他動詞化型が最も生産的におこなわれることが明らかになった。この結果は、Nichols et al. (2004) が北アジアの諸言語では他動詞化型が優勢であるとする指摘とも合致している[3]。

本稿では自他対応のもうひとつのタイプである S=A 型を取り上げ、包括的な記述を試みる。コリャーク語の先行研究では、S=A 交替に関する記述はきわめて乏しい。コリャーク語の唯一の文法書である Zhukova (1972) においても、接頭辞 ine-/ena- による逆受動化（tiŋu-k［他］→ine-tiŋu-k［自］「引きずる」、 ekmit-ə-k［他］→in-ekmit-ə-k[4]［自］「取る」など）があげられているだけで、その他の逆受動化接辞 (-cet, -tku/-tko) については触れられていない。

さらに、自他同形のパターンについても S=P、 S=A 型の両方があるが、S=P 型 (ŋəvok「始まる」「始める」) と S=A 型 (pəŋlok「尋ねる」「～を尋ねる」) が区別されないまま列挙されるにとどまっている。さらに、Zhukova (1972) は全体的に統語論の記述が欠落しており、S=A 交替による結合価の変化や格の昇降といった統語現象についても全く触れられていない。このように、自他対応に関する記述として、Zhukova (1972) は網羅的かつ体系的なものとはいえない。また、この他にコリャーク語の自他対応を専門に扱った研究も管見のかぎりない[5]。

ところで、本稿で扱う S=A 交替に含まれるのは、①逆受動化[6]、②名詞抱合、③

[3] とはいえ、能格的でありかつ逆受動化をおこなうコリャーク語の示す他動詞化型は、北アジアの主格・対格型言語が示す他動詞化型とは性質を異にするのではないかと予想される。

[4] 本稿で動詞の語例を上げる場合、特に断らない限りは不定形 -k で示す。ə は語末の 2 子音連続を避けるための挿入母音。

[5] 一方、同系のチュクチ語の逆受動については、Kozinsky et al. (1988)、 Kurebito, T. (2012) がある。特に前者は、逆受動に関する記述が詳しい。そこでは、逆受動化に接辞タイプ以外に、自他同形、抱合、補充法も含めている（ただし、語彙的接辞についての言及はない）。紙数の関係で詳細に論じる余裕はないが、逆受動化接辞に-et/-at を含めている点、動作対象が降格する際の格選択の基準が本稿のそれとは異なっていることなど、基本的にはよく似た統語操作をおこないながらも、細部には相違がみられる。一方、Kibrik et al. (2004) では同系のアリュートル語の逆受動の記述があるが、詳細なものではない。

[6] ちなみに、標識を持つと同時に、P が削除されるか斜格化する逆受動化は、Dixon

自他同形、④補充法、⑤語彙的接辞の 5 種類である。このうち、①②は A が S に交替したことが動詞側で明確に（ただし違う方法で）標示されるタイプである。一方、③④⑤はそのような標示がなされず、派生の方向が不明なタイプである。一方、自動詞文において対応する他動詞文の P がどのように顕現するかという観点からみると、①③④は P が削除されるか斜格化するかタイプであり、②⑤は動詞複合体の中に組み込まれるタイプである。すなわち、この 2 つの観点からは、①の逆受動化が最も典型的な S=A 交替であり、⑤の語彙的接辞は最も非典型的な S=A 交替ということになる。ただし、①~⑤ではいずれも、S と A の対応と同時に自動詞活用 vs 他動詞活用の対応が認められる点で、S=A 交替として統一的に扱う根拠があると考えられる。

本稿の構成は次のとおりである。2 節では S=A 交替にかかわる名詞と動詞の文法的特徴に焦点をあてて概観する。3 節では、S=A 交替にかかわる形態的手段を記述する。4 節では S=A 交替において認められる 2 つのパターン、すなわち、①P が削除されるか、斜格化するパターン、②P が抱合や語彙的接辞によって動詞に内包されるか、動詞に内包されると同時に外側にも斜格で現れるパターンのそれぞれの特徴を、形態、統語、意味の側面から明らかにする。

2. 自動詞文・他動詞文の形態的・統語的特徴

コリャーク語は、主要部である動詞、属部である名詞項のいずれの側でも文法関係が標示される二重標示型を示す。すなわち、自動詞文は 1 項 (S) を取り、その文法関係が二重標示される。一方、二項他動詞文は 2 項 (A, P) を取り、その文法関係が二重標示される。

名詞には、数、格、さらに有生性が標示される。数は単数、双数、複数が絶対格において区別される（たとえば、「頭」は lewət-Ø［絶単］、lewt-ə-t［絶双］、lewt-u［絶複］）。ただし、有生の名詞は、絶対格では数標示に関して他の名詞との区別はないが、斜格では単数 (-ne/-na) と複数 (-jək/-jk) が区別される（たとえば、an’a-na-ŋ「おばあさんに」－an’a-jək-ə-ŋ「おばあさんたちに」）。

格標識には次の 11 種類が認められる。すなわち、絶対格 (単数：-n~-Ø~重複~-ŋe/-ŋa、双数：-t/-ti/-te、複数：-u/-o/-w/-wwi/-wwe)、場所格 (-k/-kə)、道具格 (-e/-a/-te/-ta)、与格 (-ŋ)、方向格 (-etəŋ/-jtəŋ)、沿格 (-epəŋ/-ɣəpəŋ/-jpəŋ)、奪格 (-ŋqo)、

(1994:146) の逆受動化の次の定義にあてはまる。

a. 他動詞節から自動詞節を派生する。
b. P は、逆受動文では S になる。
c. P は周辺的な機能を帯び、斜格や前置詞などで表されるか、削除される。
d. 逆受動構文を示すなんらかの明確な形式的マーカーがある。

(Dixon 1994:146)

接触格 (-jite/-jeta)、原因格 (-kjit/kjet)、様態格 (-u/-o/-nu/-no)、共同格 (ɣe-/ɣa-/ɣejq-/ɣajq-..-e/-a/-te/-ta)、随格 (ɣa-/ɣawən-..-ma) である。

2.1. 名詞項の格標示

まず、名詞項のふるまいについてみる。コリャーク語は S と P は絶対格を、A は能格を取る形態的能格を示す（上例 (1)(2)(3)(4) 参照）。ただし、能格専用の標識をもつのは人称代名詞のみで、その他の名詞では有生性の階層に応じて、場所格あるいは道具格が代用される。名詞は能格がどの形式的標示を受けるかにより、大きく次の 4 つに分類される。

A) 独自の能格標識 -nan[7] を受ける名詞
B) 能格に場所格 -k が代用され、同時に有生の標示 -ne/-na（単）、-jək（複）を受ける名詞
C) 能格に道具格 -te/-ta が代用され、有生の標示を受けない名詞
B/C) 能格として任意に場所格か道具格が代用され、有生の標示も任意である名詞

どのような名詞が A) から B/C) までのどの標示を受けるかについては、表 1 をみられたい。

表 1 コリャーク語の能格標示の違いによる名詞の分類

	A	B	B／C	C
能格標識	-nan	-ne/-na-k、 -jək-ə-k	-ne/-na-k、 -jəka-k~-te/-ta	-te/-ta
名詞	人称代名詞	固有名詞 人称疑問代名詞「誰」 親族呼称	人間名詞 指示代名詞 疑問代名詞「どの」	親族名称 動物名詞 無生物名詞

能格標示の違いに反映されるこのような名詞の区別は、シルバーステイン (Silverstein 1976) らによって指摘されてきたいわゆる名詞句階層におおよそ対応している（呉人 2002）。次の (7) は A の人称代名詞、(8) は B の場所格を取る固有名詞、(9) は B/C の定か不定により場所格か道具格のどちらかを取る人間名詞、(10) は C の道具格を取る動物名詞の例である。

[7] 本稿では、人称代名詞にのみつくこの能格標識を唯一の能格専用標識として扱っているが、有生の -na と固有名詞や親族呼称について所有形を作る -n の結合したものである可能性も否定できない。

(7) En’pic-Ø　　mocɣ-ə-nan　tata-no　　mət-ko-lŋ-ə-la-ŋ-ə-n.
father-ABS.SG　1PL-E-ERG　daddy-ESS　1PL.A-IPF-regard-E-PL-IPF-E-3SG.P
「私たちは父を「タータ」と呼んでいる」【A】

(8) L’aŋe-na-k　　tejk-ə-ni-n-Ø　　icʕ-ə-n
Ljage-AN.SG-LOC(ERG)　make-E-3SG.A-3SG.P-PF　fur.coat-E-ABS.SG
qəlavol-ə-ŋ.
husband-E-DAT
「リャゲ（女性名）は夫に毛皮コートを縫った」【B】

(9) El’ʕa-ta　/　el’ʕa-na-k　　ɣəcci
woman-INSTR(ERG)　woman-AN.SG-LOC(ERG)　2SG (ABS.SG)
ne-ku-ʕejŋew-wi.
INV-IPF-call-2SG.P
「ある女／その女がお前を呼んでいる」【B/C】

(10) ŋanko　qajuju-pill’aq-a　　ko-tənəp-ŋ-ə-ne-n
there　neonatal.reindeer-DIM-INSTR(ERG)　IPF-horn-IPF-E-3SG.A-3SG.P
en’pic-Ø.
father-ABS.SG
「あそこで仔トナカイが父を角突きしている」【C】

2.2. 動詞の一致

次に動詞の側のふるまいについて見る。動詞の文法範疇には、テンス、アスペクト、ムード、ヴォイス、人称がある。動詞の屈折形式は基本的には完了／不完了というアスペクトと未来／非未来というテンスが組み合わさってできている。自動詞ではSの、他動詞ではAとPの人称の標示がなされる。このような動詞の活用があることにより、動詞の自他は形の上で明確に区別される。そのため、対応する自立の人称代名詞の出現は義務的ではない。また、語順も比較的自由である。

表 2: 自動詞 tawjiŋ「咳する」の屈折形式（1SG.S.IND）

Non-future			Future
Perfect	Resultative	Aorist	
	ɣa-tawjiŋ-iɣəm	t-ə-tawjiŋ-ə-k	t-ə-ja-tawjiŋ-ə-ŋ
Imperfect	t-ə-ku-tawjiŋ-ə-ŋ		t-ə-ja-tawjiŋ-eke

表 3: 他動詞 pŋəlo「尋ねる」の屈折形式（1SG.S/A;3SG.O.IND）

Non-future			Future
Perfect	Resultative	Aorist	
	ɣa-pəŋlo-len-Ø	t-ə-pəŋlo-n-Ø	t-ə-ja-pŋəlo-ŋ-ə-n
Imperfect	t-ə-ko-pŋəlo-ŋ		t-ə-ja-pŋəlo-jk-ə-n

ただし、名詞の格標示とは異なり、動詞の人称標示は部分的能格を示す。すなわち、能格型を示すのは (11)(12) のように 2 人称双数・複数のみで、それ以外は (13)(14) のように主格・対格型を示す。なお、(11)~(14) では人称標示部分を太字で示す。

(11) Tuji qol-**tək**-Ø.
2DU.ABS stand.up-**2DU.S**-PF
「あなたたち二人は立ち上がった」

(12) Mucɣ-ə-nan tuji mət-uʕet-**tək**-Ø.
1PL-E-ERG 2DU.ABS 1PL.A-wait-**2DU.P**-PF
「私たちはあなたたち二人を待った」

(13) ɣəmmo **t**-ə-lqut-ə-k.
1SG.ABS **1SG.S**-E-stand.up-E-PF
「私は立ち上がった」

(14) ɣəm-nan ənno **t**-uʕet-ə-n-Ø.
1SG-EGR 3SG.ABS **1SG.A**-wait-E-3SG.P-PF
「私は彼／彼女を待った」

3. S=A 交替の２つのパターンと形態的手段

第 1 節で言及したように、コリャーク語の S=A 交替には、①逆受動化、②名詞抱合、③自他同形、④補充法、⑤語彙的接辞の 5 種類が認められる。これらにはいずれも S と A の対応と同時に自動詞活用と他動詞活用の対応が共通にある。これは、前景化(S)と背景化(A)という情報構造を創出するための統語操作であるという点でも共通している。

ところで、①～⑤は、A→S を示す標識の有無、P の削除あるいは斜格化の有無という 2 つの観点から、次のような分布をなす（表 4)。

表 4　S=A 交替の標識の有無と P の顕現の仕方

	標識の有無	P の削除・斜格化	P の動詞への包含
①　逆受動化	○	○	×
②　名詞抱合	○	×	○
③　自他同形	×	○	×
④　補充法	×	○	×
⑤　語彙的接辞	×	×	○

表でみるとおり P の削除･斜格化と P の動詞への包含は相補分布をなしている。本稿ではこの点に着目し、S=A 交替を大きく、(a) P が削除されるか斜格化するパターン、(b) P が動詞に内包されるか、内包されると同時に、動詞の外部にも斜格で現れるパターンの 2 つの側面から見ていく。この 2 つのパターンにはそれぞれ異なる形態的手段が用いられる。すなわち、(a) には逆受動化接辞、自他同形、補充法が用いられる。一方、(b) には P の抱合あるいは具体的な動詞概念をもつ語彙的接辞が用いられる。

(a) P が削除されるか斜格化するパターン
　　(a-1) 逆受動化接辞
　　(a-2) 自他同形
　　(a-3) 補充法
(b) P が動詞の内部に包含されるか、同時に外部にも斜格で現れるパターン
　　(b-1) 名詞抱合
　　(b-2) 語彙的接辞

3.1.　P が削除されるか降格されるパターン

3.1.1.　逆受動化接辞

逆受動化接辞には、ine-/ena-, -cit/-cet, -tku/-tko がある。このうち、最も生産的に用いられるのは ine-/ena-であり、-cit/-cet, -tku/-tko は限られた動詞語幹にしかつかない。ただし、これらの接辞の使い分けについては今のところ不明である。また、これらの接辞は、いずれも逆受動化以外の機能を兼備する多機能的な接辞である点にも注目したい(逆受動化以外の機能については､脚注 7, 8, 9 でそれぞれ示す)。以下、まず、それぞれの逆受動化接辞のついた語例を見る。例文については、逆受動化により P が削除されるのか、あるいはどのような斜格を取るのかは、コリャーク語の他動性の問題とも密接にかかわるので、自他同形、補充法とともに 4 節で別途あげるものとする。

3.1.1.1. ine-/ena-

ine-/ena- は、上述の逆受動化接辞の中で最も生産性が高い接辞である。接尾辞 -et/-at を伴うこともある[8]。なお、ine- と ena- は母音調和による異形態であるが、そのいずれでもない ina- が現れることもある[9]。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
jici-k	ine-jici-k	「選ぶ」
jiwl-ə-k	ine-jiwl-et-ə-k	「運ぶ」
jəcocmav-ə-k	ena-ncocmav-ə-k	「準備する」
jəɣu-k	ine-jɣu-k	「噛む」
jəɣəjulev-ə-k	ine-nɣəjulev-ə-k	「教える」
jəlŋ-ə-k	ena-jəlŋ-at-ə-k	「数える」
jəqeviv-ə-k	ine-nqeviv-ə-k	「贈る」
ləʕu-k	ine-ləʕu-k	「見る」
pəl-ə-k	ine-lp-et-ə-k	「飲む」
təmt-ə-k	ine-nmət-at-ə-k	「洗う」
təŋiv-ə-k	ine-nŋiv-et-ə-k	「送る」
təʕ-ə-k	ina-tʕ-ə-k	「注ぐ」

[8] チュクチ語では、-et/-at が単独で逆受動化の機能を担っている例が報告されている (Kozinsky et al. 1988)。しかし、コリャーク語では -et/-at が ine-/ena- をともなわずに逆受動化を表わす例は見つかっていない。ちなみに、-et/-at は、出名動詞形成 (a)、逆使役化 (b) などの機能も担う多機能的な接尾辞である。

(a) ŋajŋən unmək ko-kteɣ-at-ə-ŋ-Ø.
outside very.much IPF-wind-VBL-E-IPF-3SG.S
「外はひどく風が吹いている」

(b) Akək-Ø jaja-k pel-at-e-Ø.
son-ABS.SG house-LOC leave-AC-PF-3SG.S
「息子は家に残った」

[9] ine-/ena- はこの他 1 人称単数 P の標識としても用いられる。P の人称標識の中で他動詞語幹に接頭されるのは ine-/ena- のみであり、他の人称標識は語末に接尾される。

Titi-te ɣəmmo k-ena-tənp-ə-tku-ŋ-Ø cake-ta.
needle-INSTR 1SG.ABS IPF-1SG.P-sting-E-ITR-IPF-3SG.A sister-INSTR(ERG)
「妹／姉は私を針で刺している／いた」

3.1.1.2. -cit/-cet

-cit/-cet が接尾される他動詞は数が限られている[10]。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
emtejp-ə-k	emtejp-ə-cet-ə-k	「背負う」
qəjajp-ə-k	qəjajp-ə-cet-ə-k	「（針に糸を）通す」
tənp-ə-k	tənəp-cet-ə-k	「（角で）突く」
upju-k	upju-cit-ə-k	「かじる」
ʕaʕa-k	ʕaʕa-cit-ə-k	「運ぶ」

3.1.1.3. -tku/-tko

-tku/-tko の使用も限られている[11]。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
cəvi-k	cəvi-tku-k	「切る」
kənʕu-k	kənʕu-tku-k	「捕まえる」
ʕejŋev-ə-k	ʕejŋev-ə-tku-k	「呼ぶ」

3.1.1.4. 逆受動化接辞の交替・共起

異なる逆受動化接辞が交替したり共起したりすることもありうる。ただし、交

---

[10] -cit/-cet はまた、自動詞に接尾され「互いに～する」という相互態の意味を表わす。次の例文では、-cet は後続の S の複数性を示す接尾辞 -la に同化して-cel となっていることに注意。

ʕojacek-o　qonpəŋ　ko-jacvəŋ-cel-la-ŋ-Ø　ŋalvəlʕ-epəŋ.
man-ABS.PL　always　IPF-race-mutually-PL-IPF-3S　herd-PRL
「男たちはいつも群れで競走をしている」

[11] -tku はまた、反復相 (a) や名詞語幹について「～でする」の意味を表わす場合 (b) にも用いられる。

(a) ənn-in-Ø　lewət-Ø　ne-ku-cvi-tku-ŋ-ə-n.
fish-GEN-ABS.S　head-ABS.SG　INV-IPF-cut-ITR-IPF-E-3SG.P
「彼らは魚の頭を何度も切っている」

(b) Waca　omakaŋ　mət-ko-ŋvo-la-ŋ　qapli-tku-k、
sometimes　together　1PL.S-IPF-begin-PL-IPF　ball-do.something.with-INF
uqqal'ci-tku-k.
wooden.quoit-do.something.with-INF
「私たちは時々いっしょにボール遊びや輪遊びをした」

替する場合、どのような意味的な違いがあるのか、またどのような場合に共起するのかについては今のところ明らかではない。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
jajtaŋ-ə-k	ena-jajtaŋ-ə-k/jajtaŋ-cet-ə-k	「注意する」
jiŋl-ə-k	ine-niŋl-et-ə-k/jiŋl’-ə-cit-ə-k	「捨てる」
jəcimav-ə-k	ina-ncimav-ə-k/ina-ncimaw-cit-ə-k	「壊す」
jəle-k	ine-lle-k/ine-lle-cit-ə-k	「案内する」
kəpl-ə-k	ena-jkəpl[12]-ə-k/kəpl’-ə-cet-ə-k/ena-jkəpl’-ə-cet-ə-k	「蹴る」
paje-k	ena-paje-k/paje-cet-ə-k	「剥く」
penni-k	ena-penn’-at-ə-k/penni-cet-ə-k	「襲う」
quqlu-k	ina-quqlu-k/quql’u-cit-ə-k	「(穴を) 開ける」

3.1.2. 自他同形

S=A 型の自他同形には次のような語がある。ただし、数は多くない。

＜自動詞・他動詞＞	
aŋja-k	「ほめる」
ilɣətev-ə-k	「洗う」
jejol-ə-k	「理解する」
pəŋlo-k	「尋ねる」
valom-ə-k	「聞く」

3.1.3. 補充法

S=A 型の異根動詞には、次のようなペアがある。ただし、数は限られている。

＜自動詞＞	＜他動詞＞	
ewji-k	ju-kkə	「食べる」
iwwici-k	pəl-ə-k	「飲む」
kukejv-ə-k	əpat-ə-k	「煮る」
kumiŋat-ə-k	jəto-k	「産む」
l’əl’ap-ə-k	ɣite-k	「見る」
waŋe-k	təni-k	「縫う」

[12] 基底形は **jkəpl**。語頭で **j** が脱落する（たとえば不定形の kəpl-ə-k）。

4. S=A 交替の 2 つのパターン

4.1. P の削除・降格と被動作性

能格型のコリャーク語の二項他動詞文では、通常、P が絶対格を取り、A は能格を取る。逆受動文では、基底の A が能格から絶対格に昇格するのに対し、P は削除あるいは斜格へ降格する。このような P の削除あるいは降格は、上にあげた逆受動化接辞、自他同形、補充法のいずれのパターンにおいても同様に見られる。降格して取る斜格には、道具格、場所格、方向格、与格がある。Kozinsky et al. (1988) は、チュクチ語においても同様におきる降格（ただし、方向格はなし）について、道具格はすでに存在している P を表わす場合、場所格は P の位置の含意がある場合、与格は P がまだ存在していないものの場合にそれぞれ選択されるとしている。ただし、本稿の以下の例からもうかがえるように、そのような選択条件は必ずしもすべての例にあてはまるわけではない。コリャーク語の場合、基底の P が削除されるのか、あるいは保持されるとしてどの格形式をとるのかには、むしろ、被動作性が関与していると考えられる。

Tsunoda (1981、 1985) は、他動性の考察において、動作が動作対象に及ぶ程度（被動作性）と格枠組みに相関性があるとし、二項述語を被動作性の高い順に、「直接影響」＞（対象に変化を起こすものと起こさないものとにさらに下位分類）＞「知覚」（知覚が対象に及んでいるかいないかでさらに下位分類）＞「追求」＞「知識」＞「感情」＞「関係」のように階層化している。すなわち、階層が高い動詞はより典型的な他動詞文の格枠組みを取るのに対し、低い動詞では異なる格枠組みが現れるとする。

この階層に照らしてみると、コリャーク語では、Tsunoda (1981、 1985) の「直接影響」「知覚」「追求」「知識」「感情」まで、同じ＜能格（A）－絶対格（P）＞という他動詞文の格枠組みで表わすことができる。これに対し、「関係」は自動詞文で表わされる。

(15) Kawi-na-k　　təm-ne-n-Ø　　qajuju-Ø.
Kawi-AN-LOC(ERG)　kill-3SG.A-3SG.P-PF　neonatal-reindeer-ABS.SG
「カウィは仔トナカイを殺した」【直接影響】

(16) Vava-na-k　　ɣa-valom-len-Ø　　apappo-Ø
grandmother-AN-LOC(ERG)　RES-hear-3SG.P-3SG.A　grandfather-ABS.SG
kumŋ-ə-lʕ-ə-n.
scream-E-PART-E-ABS.SG
「おばあさんはおじいさんが叫ぶのを聞いた」【知覚】

(17) Enajalʕ-a　　ɣ-enajej-len-Ø　　ineŋ-Ø.
neighbor-INSTR(ERG)　RES-search-3SG.P-3SG.A　cargo.sledge-ABS.SG
「隣人は積荷用橇を探した」【追及】

(18) ʕojacek-a ɣa-jejol-len kalikal.
man-INSTR(ERG) RES-understand-3SG.P-3SG.A book(ABS.SG)
「男は本を理解した」【知識】

(19) əmma-na-k jejwec-u ɣe-lŋ-ə-lin-Ø
mommy-AN-LOC(ERG) sorry-ESS RES-regard-E-3SG.P-3SG.A
toj-ʕojacek-Ø.
young-man-ABS.SG
「お母さんは若者を哀れに思った」【感情】

(20) Toj-eto-lʕ-ə-n kəmiŋ-ə-n ɣəmk-ə-ŋ
new-be.born-PART-E-ABS.SG son-E-ABS.SG 1SG-E-DAT
j-enajl'at-ə-ŋ-Ø.
FUT-resemble-E-FUT-3SG.S
「生まれたばかりの息子は私に似るだろう」【関係】

興味深いのは、逆受動文にもこの階層が反映していると考えられる点である。すなわち、逆受動文における基底の P の多様な格標示は、この階層が反映したものと考えられるのである。それぞれの格枠組みに該当する二項動詞とその逆受動形を以下にあげる。また、例文も示す（a が二項他動詞文、b が対応する逆受動文の例）。

4.1.1. P の削除

P が削除される動詞の大部分は、動作が動作対象に及び、変化を引き起こす被動作性の高い「直接影響」の動詞である。逆受動接辞がつく場合も、自他同形で表わされる場合もある。次のような動詞が該当する。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
ilɣətev-ə-k	ilɣətev-ə-k	「洗う」（自他同形）
jit-ə-k	ine-jit-ə-k	「（弾を）命中させる」
jəcimav-ə-k	ina-ncimav-ə-k	「割る」
jəɣu-k	ine-jɣu-k	「噛む」
jəkaŋav-ə-k	ina-nkaŋav-ə-k	「曲げる」
jəlɣat-ə-k	ina-lɣat-ə-k	「溶かす」
jəqitat-ə-k	ina-nqitat-ə-k	「凍らせる」
jətɣevat-ə-k	ena-ntɣevat-ə-k	「忘れる」
jətɣəlev-ə-k	ine-nətɣəlev-ə-k	「温める」
ləʕu-k	ine-lʕu-k	「見える」
məcetku-k	ine-mcetku-k	「壊す」

paje-k	paje-cet-ə-k	「刈る」
tejk-ə-k	ine-tejk-et-ə-k	「作る」
təm-ə-k	ena-nm-at-ə-k	「殺す」
ʕaʕa-k	ina-ʕaʕa-k	「引きずる」

以下、基底の P が削除される例文をあげる。例文中の [₽] は P が削除されていることを示す。(21a)(22a)(23a)(24a)(25a)(26a) は他動詞文である。一方、(21b)(22b)(23b)(24b) は逆受動化接頭辞 ine-/ena-/ina-、(25b) は逆受動化接尾辞 -cet を用いた対応する逆受動文、(26b) は自他同形の自動詞による対応する逆受動文である。

(21a) Kawi-na-k　　təm-ne-n-Ø　　qajuju-Ø.
Kawi-AN.SG-LOC(ERG)　kill-3SG.A-3SG.P-PF　neonatal.reindeer-ABS.SG
「カウィは仔トナカイを殺した」
(21b) Kawi-Ø　　ɣ-ena-nm-al-len　　[₽].
Kawi-ABS.SG　RES-AP-kill-ET-3SG.S
「カウィは殺した」

(22a) ɣəm-nan　mal'kit　t-ə-nkaŋav-ə-n　　uttəʔutt.
1SG-ERG　finally　1SG.A-E-bend-E-3SG.P　stick(ABS.SG)
「私はやっと棒を曲げた」
(22b) ɣəmmo　mal'kit　t-ina-nkaŋav-ə-k-Ø　　[₽].
1SG.S　finally　1SG.S-AP-bend-E-1SG.S-PF
「私はやっと曲げた」

(23a) En'pici-te　　je-jin-ŋ-ə-ni-n　　ɣətka-k
father-INSTR(ERG)　FUT-hit-FUT-E-3SG.A-3SG.P　leg-LOC
kajŋ-ə-n.
bear-E-ABS.SG
「父はクマの足に命中させるだろう」
(23b) En'pic-Ø　　jaŋʕaw　　j-ine-jit-ə-ŋ-Ø　　[₽].
father-ABS.SG　accurately　FUT-AP-hit-E-FUT-3SG.S
「父は正確に命中させるだろう」

(24a) ʕətʕ-a　　ku-jɣu-ŋ-ni-n　　kəmiŋ-ə-n.
dog-INSTR(ERG)　IPF-bite-IPF-3SG.A-3SG.P　child-E-ABS.SG
「犬が子供を噛んでいる」

(24b) ʕətʕ-ə-n ɣ-ine-jɣu-lin [Ꝑ].
dog-E-ABS.SG RES-AP-bite-3SG.S
「犬が噛んでいる」

(25a) ʕojacek-a ko-paje-ŋ-ne-n jaja-k kəmiŋ-ə-n.
man-INSTR(ERG) IPF-clip-IPF-3SG.A-3SG.P tent-LOC child-E-ABS.SG
「男が家で子供（の髪）を刈っている」
(25b) ʕojacek-Ø ko-paje-cet-ə-ŋ-Ø jaja-k [Ꝑ].
man-ABS.SG IPF-clip-AP-E-IPF-3SG.S tent-LOC
「男が家で刈っている」

(26a) Mənɣ-ə-t metʕaŋ q-ilɣətew-Ø.
hand-E-ABS.DU well 2SG.A.IMPR-wash-3DU.P
「手をしっかり洗いなさい」
(26b) Metʕaŋ q-ilɣətew-Ø [Ꝑ].
well 2SG.S.IMPR
「しっかり洗いなさい」

このように、被動作性の高い動詞の場合には P が削除されるが、この被動作性の高さは前景化・背景化といった談話構造とも無関係ではないであろう。A が能格から絶対格に昇格し、P が絶対格から斜格に降格するという操作は、談話構造からみれば、A の前景化と P の背景化にほかならない。被動作性の高い動詞は、動作の影響を被る対象である P を背景化しにくいために他動詞文が典型的である。これに対し、逆受動化、すなわち、自動詞化においては、P の出現を抑制することによってのみ、A の前景化が可能になるのだと解釈できる[13]。

---

13 ちなみに、この類の逆受動文では具体的な意味を表わす P は出現できず削除されるが、不特定の「なにか」という形でならば現れることがある。jeq「なに」は道具格で現れる場合 (a) も場所格 (b) で現れる場合もある。(a)(b)は、この異なる P の格標識を除けば、動詞語幹だけが異なる逆受動文である。このことから、P の異なる格標識は、動詞の意味特徴によることを示唆する。ただし、このためにそもそも P を削除しうるこの 2 つの動詞を異なる意味類に分類すべきかどうかは現時点では即断できない。

(a) Kal’a-Ø jaja-k k-ina-nqitat-ə-ŋ-Ø jeq-e amu.
Kal’a-ABS.SG house-LOC IPF-AP-freeze-E-IPF-3SG.S what-INSTR probably
「カーリャは家でなにかを凍らせている／いた」
(b) Kal’a-Ø jaja-k k-ina-ncimav-ə-ŋ-Ø jeq-ə-k amu.
Kal’a-ABS.SG house-LOC IPF-AP-break-E-IPF-3SG.S what-E-LOC probably
「カーリャは家でなにかを割っている／いた」

4.1.2.　P の道具格への降格

逆受動化に際して、P が道具格に降格する動詞には、大きく 2 種類が観察される。すなわち、「運ぶ」「降ろす」「送る」など動作対象の位置の変化を意味する動詞と、「食べる」「飲む」などの摂食動詞である。対象の位置の変化は、対象自体の内的変化を含意するわけではない。このことが、P が削除される上述の動詞と格枠組みにおいて区別される要因ではないかと推測される。一方、摂食行為は、対象が体内に取り込まれ、その変化が確認できないうえに、動作者は同時に受益者にもなるという点で、上述動詞とは異なる特徴を示すといえる。すなわち、ここでは、被動作性だけでなく、動作者性 (Agency) が関与していると考えられる。ちなみに、下に見るように、コリャーク語の「食べる」「飲む」には異根の自動詞・他動詞のペアがある。このことは、摂食動詞がもつ自動詞と他動詞の中間的な性質を反映しているともいえるであろう。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
ekmit-ə-k	in-ekmit-ə-k	「受け取る」
jet-ə-k	ine-jet-ə-k	「持ってくる」
jiwl-ə-k	ine-jiwl-et-ə-k	「運ぶ」
ju-kkə	ewji-k	「食べる」
jəpe-k	ine-jpe-k	「降ろす」
pəl-ə-k	iwwici-k	「飲む」
təŋiv-ə-k	ine-nŋiv-ə-k	「送る」

次の (27b)(28b)(29b) は、逆受動化接頭辞 ine-/ena- による例、(30b) は nu（他）「食べる」に対応する異根 ewji（自）の例、(31b) はəpat（他）「煮る」に対応する異根 kukejv（自）の例である。

(27a) Apappo-na-k　　ɣe-nŋiv-ə-lin-Ø
grandfather-AN.SG-LOC(ERG)　RES-send-E-3SG.P-3SG.A
wojv-etəŋ　picɣ-ə-n.
village-ALL　food-E-ABS.SG

(27b) Appapo-Ø　ɣ-ine-nŋivel-lin　picɣ-e　wojv-etəŋ.
grandfather-ABS.SG　RES-AP-send-3SG.S　food-INSTR　village-ALL
「おじいさんは食料を村に送った」

(28a) Apappo-na-k kimitʕa-w
grandfather-AN.SG-LOC(ERG) household.belongings-ABS.PL
ɣe-jiwl-ə-linew-Ø ŋalvəlʕ-ə-ŋqo.
RES-carry-E-3SG.P-3SG.A herd-E-ABL
(28b) Appapo-Ø k-ine-jiwl-et-ə-ŋ-Ø
grandfather-ABS.SG IPF-AP-carry-ET-E-IPF-3SG.S
kimitʕa-ta ŋalvəlʕ-ə-ŋqo.
household.belongings-INSTR herd-E-ABL
「祖父は家財道具をトナカイ群れのキャンプから運んだ」

(29a) En'pici-te tewʕel-Ø pəce
father-INSTR(ABS) dried.fish-ABS.SG for.the.moment
ɣ-ə-jpe-lin-Ø enanomkaw-ja-k.
RES-E-unload-3SG.P-3SG.A put.away-house-LOC
(29b) En'pic-Ø tewʕel-e pəce ɣ-ine-jpe-lin
father-ABS.SG dried.fish-INSTR for.the.moment RES-AP-unload-3SG.S
enanomkaw-ja-k.
put.away-house-LOC
「父は干し魚をまず物置にしまった」

(30a) En'pici-te ɣe-nu-lin-Ø kinuŋi-Ø.
father-INSTR(ERG) RES-eat-3SG.P-3SG.A meat-ABS.SG
(30b) En'pic-Ø ɣ-ewji-lin kinuŋva-ta.
father-ABS.SG RES-eat-3SG.S meat-INSTR
「父は肉を食べた」

(31a) ɣəm-nan t-əpat-ə-n-Ø kinuŋ-i.
1SG-ERG 1SG.A-boil-E-3SG.P-PF meat-ABS.SG
(31b) ɣəmmo t-ə-kukejv-ə-k-Ø kinuŋva-ta.
1SG.ABS 1SG.S-E-boil-E-1SG.S-PF meat-INSTR
「私は肉を煮た」

4.1.3. P の場所格への降格

P が場所格を取る動詞の類は、他の類と比較して、特定の意味特徴を抽出するのがむずかしい。ただし、動作が対象に及ぶが、変化が起きるかどうかは含意されていない動詞が多いようである[14]。

[14] たとえば、「蹴る」「殴る」「触る」などの動詞は、'surface-contact' verbs として break、

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
cəɣ-ə-k	in’e-cɣ-et-ə-k	「掘る」
ɣənnit-ə-k	ina-ɣənnit-ə-k	「守る」
jəji-k	ine-nni-k	「触る」
kəpl-ə-k	ena-jkəpl-at-ə-k	「殴る」
lejv-ə-k	ine-lejv-et-ə-k	「案内する」
qapl-ə-k	qapl’o-cet-ə-k	「蹴る」

次の (32b)(33b)(34b)(35b) は、いずれも逆受動化接頭辞 ine-/ena- による逆受動文の例である。

(32a) qit-ə-kinuŋi-Ø　maleta　ku-nni-ŋ-ni-n
frozen-E-meat-ABS.SG　slowly　IPF-touch-IPF-3SG.A-3SG.P
Kawi-na-k.
Kawi-AN.SG-LOC(ERG)

(32b) Kawi-Ø　maleta　t-ə-k-ine-nni-ŋ　qit-ə-kinuŋva-k.
Kawi-ABS.SG　slowly　1SG.S-E-IPF-AP-touch-IPF　frozen-E-meat-LOC
「カウィはゆっくり凍った肉に触っている」

(33a) Ajɣəve　vava-na-k　ɣe-jici-linew-Ø
yesterday　grandmother-AN.SG-LOC(ERG)　RES-gather-3PL.P-3SG.A
picɣ-u.
food-ABS.PL

(33b) Ajɣəve　vava-Ø　ɣe-ine-jici-linew-Ø　picɣ-ə-k.
yesterday　grandmother-ABS.SG　RES-AP-gather-3PL.P-3SG.A　food-E-LOC
「昨日、祖母は必要な食料を集めた」

(34a) əmma-na-k　ko-n’ajtanŋ-ə-ŋ-ne-n
mum-AN.SG-LOC(ERG)　IPF-take.care.of-E-IPF-3SG.A-3SG.P
kimitʕa-w.
household.belongings-ABS.PL

(34b) əmma-Ø　k-ena-n’ajtanŋ-ə-cet-ə-ŋ-Ø
mum-ABS.SG　IPF-AP-take.care.of-E-AP-E-IPF-3SG.S
kimitʕ-ə-k.
household.belongings-E-LOC
「お母さんは家財道具を保管している」

---

bend などの ‘change-of-state’ verbs と区別されることがある (Fillmore 1970:125)

(35a) ɣəm-nan t-ə-pj-ə-n-Ø ʔəcʔ-ə-n.
1SG-ERG 1SG.A-E-remove-E-3SG.P-PF fat-E-ABS.SG
(35b) ɣəmmo t-ine-pj-ə-k-Ø ʔəcʔ-ə-k.
1SG.ABS 1SG.S-AP-remove-E-1SG.S-PF fat-E-LOC
「私は脂身をはがした」

4.1.4. P の方向格への降格

P が方向格を取る動詞はそれほど多くない。下の 4 つの動詞をみるかぎり、動作が対象に及ぶことが含意されない「襲いかかる」「つかもうとする」のような動詞、また、同じく動作が対象に及ばない「嗅ぐ」「見る」といった知覚動詞である。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
ekimit-ə-k	in-ekmit-ə-k	「つかもうとする」
eŋo-k	ena-jŋo-k	「嗅ぐ」
ɣite-k	l’əl’ap-ə-k	「見る 」
penn’-ə-k	penn’-ə-cet-ə-k	「襲いかかる」

(36b)(37b) は逆受動化接辞による例、(38b) は異根動詞による例である。

(36a) Vava-na-k ɣ-eŋo-len-Ø kinuŋi-Ø.
grandmother-AN.SG-LOC(ERG) RES-smell-3SG.P-3SG.A meat-ABS.SG
(36b) Vava-Ø ɣ-ena-jŋo-len kenuŋva-jtəŋ.
grandmother-ABS.SG RES-AP-smell-3SG.S meat-ALL
「おばあさんは肉を嗅いだ」

(37a) Qajəkmiŋ-ə-ta ɣ-ekmil-lin-Ø jəllə-Ø.
boy-E-INSTR(ERG) RES-grasp-3SG.P-3SG.A twig-ABS.SG
(37b) Qajəkmiŋ-ə-n ɣ-in-ekmil-lin jəll-etəŋ.
boy-E-ABS.SG RES-AP-grasp-3SG.S twig-ABS.SG
「少年は小枝をつかんだ」

(38a) ɣəm-nan t-ə-ɣit-ə-n-Ø nutenut.
1SG-ERG 1SG.A-E-watch-E-3SG.P-PF tundra(ABS.SG)
(38b) ɣəmmo t-ə-ll’ap-ə-k-Ø nota-jtəŋ.
1SG.ABS 1SG.S-E-watch-E-1SG.S-PF tundra-ALL
「私はツンドラを見た」

4.1.5.　P の与格への降格

P が与格を取るのは、Tsunoda (1981、1985) の階層では被動作性の低い階層の「知覚」「追求」「知識」「感情」を表わす動詞にかぎられる。

＜他動詞＞	＜自動詞＞	
acacɣ-o ləŋ-ə-k	acacɣ-at-ə-k	「笑う」
jejol-ə-k	jejol-ə-k	「理解する」
jejwec-u ləŋ-ə-k	jejwe-cet-ə-k	「哀れに思う」
jəɣəjulev-ə-k	ine-nɣəjulev-ə-k	「教える」
ləmal-o ləŋ-ə-k	ləmal-av-ə-k	「信用する」
palomtel-ə-k	palomtel-ə-k	「聞く」
uʕet-ə-k	uʕet-ə-k	「待つ」
valom-ə-k	ena-valom-ə-k	「聞こえる」

次の (39b)(40b) は逆受動化接辞による例、(41b)(42b) は自他同形による例である。

(39a) Ecɣi　ɣəm-nan　t-ə-ko-nɣəjulev-ə-ŋ-ə-n.
now　1SG-ERG　1SG.A-E-IPF-teach-E-IPF-E-3SG.P
cawcəva-jeləjel　majŋ-ə-kale-ja-k.
reindeer.herder-tongue(ABS.SG)　big-E-write-house-LOC

(39b) Ecɣi　ɣəmmo　t-ə-k-ine-nɣəjulev-ə-ŋ　cawcəva-jelə-ŋ
Now　1SG-ABS.SG　1SG.S-E-IPF-AP-teach-E-IPF　reindeer.herder-tongue-DAT
majŋ-ə-kale-ja-k.
big-E-write-house-LOC
「私は今、大学でコリャーク語を教えている」

(40a) El’ʔa-ta　k-ə-ʕejŋew-ŋ-ə-ni-n　kəmiŋ-ə-n.
woman-INSTR　IPF-E-call-IPF-E-3SG.A-3SG.P　child-E-ABS.SG

(40b) El’ʔa-Ø　k-ə-ʕejŋev-ə-tku-ŋ　kəmiŋ-ə-ŋ.
woman-ABS.SG　IPF-E-call-E-AP-IPF　child-E-DAT
「女は子供を呼んでいる」

(41a) Kalicit-ə-lʕ-ə-n　en’pici-te　ɣ-uʕel-lin-Ø.
study-E-PART-E-ABS.SG　father-INSTR(ERG)　RES-wait-3SG.P-3SG.A

(41b) En’pic-Ø　ɣ-uʕel-lin-Ø　kalicitəlʕ-ə-ŋ.
father-ABS.SG　RES-wait-3SG.S　student-E-DAT
「父親は学生を待った」

(42a) Tata-na-k ɣəmmo ena-valom-e-Ø.
daddy-AN.SG-LOC(ERG) 1SG.ABS 1SG.P-listen-PF-3SG.A
(42b) Tata-Ø ɣəmkəŋ valom-e-Ø.
daddy-ABS.SG 1SG.DAT listen-PF-3SG.S
「お父さんは私の言うことを聞いた」

4.2. Pが動詞に包含されるパターン

次にPが動詞に包含されるパターン、すなわちPが動詞の内部に包含されるか、同時に外部にも斜格で現れるパターンについてみる。このパターンは、Pの抱合あるいは他動詞的意味をもつ語彙的接辞によって形成される。いずれの場合にもPが動詞の中に入り込むと同時に、Aは絶対格に昇格し、動詞は自動詞活用する。

4.2.1. 名詞抱合

(43a)(44a)(45a) はPが動詞の外側で絶対格で現れ他動詞活用している例、(43b)(44b)(45b) は抱合され、自動詞活用している例である (Kurebito、 M. 2001)。

(43a) ɣəm-nan t-ə-mle-n-Ø uttəut.
1SG-ERG 1SG.A-E-break-3SG.P-PF stick(ABS.SG)
(43b) ɣəmmo t-utt-ə-mle-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-stick-E-break-1SG.S-PF
「私は木を折った」

(44a) ɣəm-nan kinuŋi-Ø t-əpat-ə-n-Ø.
1SG-ERG meat-ABS.SG 1SG.A-boil-E-3SG.P-PF
(44b) ɣəmmo t-ə-kenoŋva-pat-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-meat-boil-E-1SG.S-PF
「私は肉を煮た」

(45a) ɣəm-nan qoja-w t-ə-numekew-new-Ø.
1SG-ERG reindeer-ABS.PL 1SG.A-E-herd-3PL.P-PF
(45b) ɣəmmo t-ə-qoja-nomakav-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-reindeer-herd-E-1SG.S-PF
「私はトナカイを集めた」

4.2.2. 語彙的接辞

コリャーク語には、名詞語幹に生産的に接続して、出名動詞を形成するさまざまな接辞がある。これらの多くは、「狩る」「採りに行く」「捜す」「脱ぐ」「外れる」

「始まる」など、他の言語では自立動詞で表されるような具体的な動詞概念を表わす語彙的接辞である（呉人 2001）。接合する名詞語幹には、P、A、道具名詞、方向名詞にあたるものがあるが、このうち、P にあたる名詞語幹に接合する語彙的接辞が最も多い。こうして作られた出名動詞は、自動詞活用し、S は絶対格を取る。P にあたる名詞語幹につく語彙的接辞には次のようなものがある。

＜語彙的接辞＞
-ɣijke　「乗用に捕まえる」
-ɣili/-ɣele　「探す、捜す」
-ŋta/-ŋəta　「取りに行く」
-ŋel/-ŋal　「（主に植物資源について）採りに行く」
-ŋəjt　「刈る、狩る」
-tve/-tva　「脱ぐ、外す、剥がす」
te-/ta-..-ŋ　「作る」
-u/-o　「食べる、飲む、（野生動物を）殺す」

これらの語彙的接辞が P にあたる名詞語幹について作られた出名動詞は、受益者をもたない場合、S のみが標示される自動詞活用する。以下、(46a)は自立他動詞 et「取りに行く」による他動詞文、(46b) は同様の意味を表わす語彙的接尾辞 -ŋta による自動詞文。(47a) は自立他動詞 nu「食べる」による他動詞文、(47b) は同様の意味を表わす語彙的接尾辞 -u による自動詞文。(48a) は自立他動詞 tejk「作る」による他動詞文、(48b) は同様の意味を表わす語彙的接周辞 ta-..-ŋ による自動詞文の例である。

(46a) ɣəm-nan　t-et-ə-n-Ø　ittəit.
　　1SG-ERG　1SG.A-go.for-E-3SG.P-PF　ice(ABS.SG)
(46b) ɣəmmo　t-ett-ə-ŋta-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-ice-E-go.for-1SG.S-PF
　　「私は氷を取りに行った」

(47a) ɣəm-nan　t-ə-nu-n-Ø　ənnə-tʕul-Ø.
　　1SG-ERG　1SG.A-E-eat-3SG.P-PF　fish-meat-ABS.SG
(47b) ɣəmmo　t-ənnə-tʕul-u-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-fish-piece-eat-1SG.S-PF
　　「私は魚肉を食べた」

(48a) ɣəm-nan pəlak-ə-t t-ə-tejk-ə-net-Ø.
1SG-ERG boot-E-ABS.DU 1SG.A-E-make-E-3DU.P-PF
(48b) ɣəmmo t-ə-ta-pla-ŋ-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-make-boot-make-E-1SG.S-PF
「私はブーツを作った」

4.2.3. 名詞抱合と語彙的接辞の相関性

以上みたように、名詞抱合と語彙的接辞による出名動詞には、P を動詞複合体の中に包含することにより背景化するという働きをもつという共通点がある。それゆえに、語彙的接辞とそれに意味的に対応する自立的な他動詞との間にはある種の相補的な関係があることがうかがえる。

語彙的接辞と自立動詞のペアには、-ɣili/-ɣele~enajej「探す」、te-/ta-..-ŋ~tejk「作る」、-tve~pj「脱ぐ」、-ɣijke~jɣ「捕まえる」、-u/-o~nu「食べる」、pl「飲む」、nm「(野生動物を) 殺す」などがある。これらは、いずれも相互に語源的な関係の認められないペアである。言い換えれば、語彙的接辞は自立的な動詞に由来するのではなく、元々接辞であったものと考えられる。

このうち、-ɣili/-ɣele「探す」に対応する自立動詞 enajej は分析形は許容されるが、P を抱合することはできない。一方、語彙的接辞 -ɣili/-ɣele による出名動詞は許容される。これは、語彙的接辞と名詞抱合の機能の重複を回避するためであると考えられる。次の (49a) は自立動詞 enajaj による分析的表現、(49b) は対応する語彙的接辞-ɣili/-ɣele による出名動詞、(49c) は非文となる名詞抱合の例である。

(49a) ɣəm-nan t-enajej-ə-n-Ø wapaq-Ø.
1SG-ERG 1SG.A-look.for-E-3SG.P-PF fly.agaric-ABS.SG
(49b) ɣəmmo t-ə-wapaq-ɣele-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-fly.agaric-look.for-1SG.S-PF
(49c) *ɣəmmo t-ə-wapaq-enajej-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-fly.agaric-look.for-E-1SG.S-PF
「私はベニテングケを探した」

一方、それ以外の te-/ta-..-ŋ~tejk「作る」、-tve~pje「脱ぐ」、-ɣijke~jɣ「捕まえる」、-u/-o~nu「食べる」、pl「飲む」、nm「(野生動物を) 殺す」などについては、自立動詞はそのままでは抱合が不可能であるが、逆受動形成接辞 ine-/ena-、あるいは接尾辞-et/-at が (場合によっては同時に両方とも) 接続すると抱合形が可能になる[15]。次はそれぞれ、(50a)(51a)(52a) が出名動詞、(50b)(51b)(52b) が対応する自立

[15] 一方、同系のチュクチ語では、-tku/-tko や-et/-at は抱合形と共起できるが、ine-/-ena は共起できないとされている (Kozinsky et al. 1988)。

動詞による分析形、(50c)(51c)(52c) が -et/-at が動詞語幹に接尾された抱合形、(50d)(51d)(52d) が-et/-at のつかない非文の例である。

te-/ta-..-ŋ~tejk「作る」:

(50a) ɣəmmo　t-ə-ta-macina-ŋ-ə-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-make-car-make-E-1SG.S-PF
(50b) ɣəm-nan　macina-Ø　t-ə-tejk-ə-n-Ø.
　　1SG-ERG　car-ABS.SG　1SG.A-E-make-E-3SG.P-PF
(50c) ɣəmmo　t-ə-macina-tejk-et-ə-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-car-make-ET-E-1SG.S-PF
(50d) *ɣəmmo　t-ə-macina-tejk-ə-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-car-make-E-1SG.S-PF
　　「私は自動車を修理した」

-tve~pj「脱ぐ」:

(51a) ɣəmmo　t-ə-peŋke-tve-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-cap-take.off-1SG.S-PF
(51b) ɣəm-nan　peŋke-n　t-ə-pj-ə-n-Ø.
　　1SG-ERG　hat-ABS.SG　1SG.A-E-take.off-E-3SG.P-PF
(51c) ɣəmmo　t-ə-peŋke-pj-et-ə-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG-E-hat-take.off-ET-E-1SG.S-PF
(51d) *ɣəmmo　t-ə-peŋke-pj-ə-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-hat-take.off-E-1SG.S-PF
　　「私は帽子を脱いだ」

-ɣijke~jɣ「捕まえる」:

(52a) ɣəmmo　t-ə-qoja-ɣijke-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-reindeer-catch-1SG.S-PF
(52b) ɣəm-nan　qoja-ŋa　t-ə-jɣ-ə-n-Ø.
　　1SG-ERG　reindeer-ABS.SG　1SG.A-E-catch-E-3SG.P-PF
(52c) ɣəmmo　t-ə-qoja-ena-jɣ-at-ə-k-Ø.
　　1SG.S　1SG.S-E-reindeer-AP-catch-ET-E-1SG.S-PF
(52d) *ɣəmmo　t-ə-qoja-jɣ-ə-k-Ø.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-reindeer-catch-E-1SG.S-PF
　　「私はトナカイを捕まえた」

一方、-u/-o は自立動詞と上述の他の語彙的接辞とはやや異なる相関関係を示す。

すなわち、「食べる」と「(野生動物) を殺す」の意味では、上例と同じく出名動詞 (53a)(54a)(55a) と自立動詞による分析形 (53b)(54b)(55b) が可能であるが、「(家畜を) 殺す」場合には語彙的接辞は許容されず、代わりに自立動詞による抱合形と分析形が許容される。

(53a) ɣəmmo t-ənnətʕul-u-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-fish.meat-eat-1SG.S-PF
(53b) ɣəm-nan t-ə-nu-n-Ø ənnətʕul-Ø.
1SG-ERG 1SG.A-E-eat-3SG.P-PF fish.meat-ABS.SG
(53c) *ɣəmmo t-ənnətʕul-nu-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-fish.meat-eat-1SG.S-PF
「私は魚を食べた」

(54a) ɣəmmo t-əlw-u-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-wild.reindeer-kill-1SG.S-PF
(54b) ɣəm-nan t-ə-nm-ə-n-Ø əlwəʔəl.
1SG-ERG 1SG.A-E-kill-E-3SG.P-PF wild.reindeer(ABS.SG)
(54c) *ɣəmmo t-əlw-ə-nm-at-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-wild.reindeer-E-kill-ET-E-1SG.S
「私は野生トナカイを殺した」

(55a) *ɣəmmo t-ə-qoj-u-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-domestic.reindeer-kill-1SG.S-PF
(55b) ɣəm-nan qoja-ŋa t-ə-nm-ə-n-Ø.
1SG-ERG domestic.reindeer-ABS.SG 1SG.A-E-kill-E-3SG.P-PF
(55c) ɣəmmo t-ə-qoja-nm-at-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-domestic.reindeer-kill-ET-E-1SG.S-PF
「私は家畜トナカイを殺した」

このほか、-ŋel「採りに行く」、-ŋəjt「狩る」、-ɣijke「(乗用に) 捕まえる」などは、対応する自立動詞が認められず、常にこれらの接辞によってのみ表される。

4.2.4. P が動詞の内部および外部に現れるパターン

P にあたる名詞は、他動詞や語彙的接辞と結びついて抱合形や出名動詞を形成するだけでなく、同時に動詞の外に斜格形で現れることも可能である。斜格として現れる格には、道具格、場所格がある。また、斜格で現れる名詞は、修飾語を伴う複合名詞の形式をとる。すなわち、動詞の内部に現れる名詞は名詞項としての

統語的役割をもつというよりも、むしろ動詞に対する包摂的な類別辞的役割を果たし、斜格で現れる複合名詞が事実上の名詞項となると考えられる。抱合による同様の例は他言語（カユーガ語 Cayuga［イロコイ族］、オノンダガ Onondaga［イロコイ語族］、カド語 Caddo［カド語族］、ムンドゥルク語 Mundurukú［トゥピ語族］など）でも報告されている (Mithun 1986)[16]。一方、語彙的接辞による例は管見の限り見当たらない。

次の (56)(57) は抱合による例（(56) では P は道具格、(57) では場所格）、(58) は語彙的接辞による例（P は道具格）である。また、P にあたる名詞が他動詞に抱合されるか語彙的接辞を伴っているため、自動詞化している。

(56)　ɣəmmo　　t-utt-ə-mle-k-Ø　　iwl-utt-e.
　　1SG.ABS　1SG.S-stick-E-break-1SG.S-PF　long-stick-INSTR
　　「私は長い木を折った」
(57)　ɣəmmo　　t-ə-ɣətka-ʔ-akmet-ə-k-Ø　　qoja-ɣətka-k.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-leg-E-grasp-E-1SG.S-PF　reindeer-leg-LOC
　　「私は家畜トナカイの足をつかんだ」
(58)　ɣəmmo　　t-ə-qoja-ɣijke-k-Ø　　məɣo-qoja-ta.
　　1SG.ABS　1SG.S-E-reindeer-catch-1SG.S-PF　caravan-reindeer-INSTR
　　「私はキャラバン用のトナカイを捕まえた」

したがって、これらの意味は何通りにも表わされることになる。たとえば、「私は熱いお茶を飲んだ」の意味は、次の (59a) のように caj「お茶」が動詞の側にも、その外側にも現れるパターンをはじめ、P が語彙的接辞に付加された自動詞文 (59b)、caj を P としてとり自立的な他動詞 lp による分析的な他動詞文 (59c)、-et を伴う抱合形 (59d) の 4 つのパターンで表わすことができる。ただし、これら 4 通りのパターン相互のニュアンスの違いについては今のところ明らかではない。

(59a)　ɣəmmo　　ɣəl’-caj-a　　t’-ə-caj-u-k-Ø.
　　1SG.ABS　hot-tea-INSTR　1SG.S-E-tea-drink-1SG.S-PF

[16] 次はオノンダガ語の例である。(a) のように動詞の外に現れる P と同一名詞が抱合される例、(b) のように、動詞の外には具体的な名詞が現れるのに対し、内部にはより包摂的な名詞が類別辞として抱合される例の両方が見られる。
(a)　K-nuhsa-nuhweʔs　neʔ　　ak-nuhsa-ʔ.
　　1 単-家-好む　　限定詞　1 単-家-名詞接尾辞
　　「私は自分の家（家）が気に入っている」
(b)　Ake-naskw-ajɛʔ　tjonhoskwɛːt.
　　1 単-家畜-持つ　牛
　　「私は牛（家畜）を持っている」

(59b) ɣəmmo t’-ə-t’ɣəl’-caj-u-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-hot-tea-drink-1SG.S-PF
(59c) ɣəm-nan ɣəl-caj-Ø t-ə-lp-ə-n-Ø.
1SG-ERG hot-tea-ABS.SG 1SG.A-E-drink-E-3SG.P-PF
(59d) ɣəm-mo t-ə-ɣəl-caj-ə-lp-et-ə-k-Ø.
1SG-ABS 1SG.S-E-hot-tea-drink-E-ET-E-1SG.S-PF
「私は熱いお茶を飲んだ」

抱合あるいは語彙的接辞と合成される名詞が、斜格で現れる名詞と異なる場合がある。この場合には、動詞に包含される名詞はより包摂的な意味をもつ名詞となる。

(60) ɣəmmo t-utt-ə-ŋəjt-ə-k-Ø təqəle-te.
1SG.ABS 1SG.S-stick-E-prune-E-1SG.S-PF poplar-INSTR
「私はポプラの木を刈った」

5. おわりに

本稿では、コリャーク語における S=A 交替の包括的な記述を試みた。現時点で明らかになっているのは、次の点である。

1) コリャーク語の S=A 交替には、① 対応する他動詞文の P が削除されるか、斜格化するパターン、② P が抱合や語彙的接辞によって動詞に内包されるか、動詞に内包されると同時に動詞の外側にも現れるパターンの 2 種類がある。
2) このうち、① には被動作性の階層がかかわっている。
3) ② のパターンでは、動詞の中に内包される名詞は、名詞項としての統語的役割をもつというよりも、むしろ動詞に対する包摂的な類別辞的役割を果たし、斜格で現れる複合名詞が事実上の名詞項となると考えられる。

今後の課題として、①の特に、まだ十分に明らかにされていない場所格に昇格する場合の動詞の意味特徴についてさらに考察を深める必要がある。最終的には、S=P 型と S=A 型の両方を比較しつつ、コリャーク語の自他対応の全体像を描き出したいと考えている。

【略語表】

A=transitive subject	ABL=ablative	ABS=absolutive	AC=anticausative
ALL=allative	AN=animate	AP=antipassive	DAT=dative
DIM=diminutive	DU=dual	E=epenthesis	ERG=ergative
ESS=essive	ET=-et/-at	FUT=future	GEN=genitive
IMPR=imperative	INF=infinitive	INSTR=instrumental	INV=inverse

IPF=imperfective	ITR=iterative	LOC=locative	PART=participle
P=object	PF=perfective	PL=plural	PRL=prolative
RES=resultative	S=intransitive subject		SG=singular

【参考文献】

呉人　惠

2001　「コリャーク語の出名動詞と名詞抱合」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』7「環北太平洋の言語」成果報告書シリーズ A2-002, 101-124.

2002　「コリャーク語の名詞句階層と格・数標示」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 107-125.

2013　「コリャーク語動詞の自他対応―中立型か他動詞化型か―」北方言語ネットワーク編『北方言語研究』3: 85-109.

Dixon, R.M.W.

1994　*Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fillmore, C. J.

1970　The grammar of hitting and breaking. In: R.A.Jacobs and P.S.Rosenbaum (eds.) *Readings in English transformational grammar.* 120-133. Waltham, MA: Ginn and Company.

Kibrik, A.E., Kodzasov S.V. and Muravyova, I.A.

2004　*Language and folklore of the Alutor people,* ELPR Publication Series A2-042. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Kozinsky, I.Sh., Nedjalkov, V.P. and Polynskaja, M.S.

1988　Antipassive in Chukchee: oblique object, object incorporation, zero object. In: M. Shibatani (ed.) *Passive and Voice*. 651-706. Amsterdam: John Benjamins.

Kurebito, M.

2001　Noun incorporation in Koryak. In: O. Miyaoka and F. Endo (eds.). *Languages of the North Pacific Rim* 6: 29-58. Osaka: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.

Kurebito, T.

2012　An outline of valency-reducing operations in Chukchi. In: W. Nakamura and R. Kikusawa (eds.) *Odjectivization and subjectivization: a typology of the voice systems,* Senri Ethnological Studies 77: 177-189. Osaka: National Museum of Ethnology.

Mithun, M.

1986　The convergence of noun classification systems. In: Collette Craig (ed.) *Noun classes and categorization. TSL* 7: 379-397.

Nichols, J., D. Peterson, and J. Barnes

2004　Transitivizing and detransitivizing languages. *Linguistic Typology* 8-2: 149-211.

Tsunoda, T.

1981　Split case-marking patterns in verb-types and tense/aspect/mood. *Linguistics* 19:389-438.

1985　Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21:385-396.

Silverstein, M.

1976　Hierarchy of features and ergativity. In: R.M.W.Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*. 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

Zhukova, A. N.

1972　*Grammatika korjakskogo jazuka*. Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

S=A alternation in Koryak

Megumi KUREBITO
University of Toyama

The present paper aims to give a comprehensive description of the morphological and syntactic features of the Koryak S=A alternation. Investigation reveals several points of interest.

(1) The Koryak S=A alternation shows two main patterns.
PATTERN 1: the underlying A becomes S marked with the absolutive, while the underlying P is either omitted or demoted to a non-core oblique case, that is, the instrumental, locative/allative, or dative.
PATTERN 2: the underlying A becomes S marked with the absolutive, while the underlying P is incorporated into the verb complex by way of noun incorporation or a verbal lexical affix. At the same time, the underlying P sometimes occurs in an oblique case—the instrumental or the locative—outside the verb complex with the incorporated noun.

(2) Omission or occurrence of various cases in PATTERN 1 is hierarchically interconnected according to Affectedness, one of the most essential factors in determining transitivity; omission>the instrumental>the locative>the allative>the dative.

(3) In PATTERN 2, the incorporated noun functions as a classifier rather than a syntactic argument, which may allow occurrence of the apparently redundant P outside the verbal complex. In other words, the outer P in the non-core oblique case can be regarded as a virtual argument.